

身近な生薬シリーズ その2



生薬とは植物を中心に、動物や鉱物をふくめ、天然のものから作られた薬です。中国薬物研究所などがまとめたところによると、生薬の種類は薬草類が278種、動物類52種、昆虫類18種、鉱物類36種の合計394種です。漢方薬がなぜ効果的か？それは漢方薬の原料であるこの「生薬」に秘密があります。

芍薬(シャクヤク)



初夏に可憐で美しい花を咲かせることでも、古くから人々に愛されている植物であるシャクヤクにはペオニフロリンなどの有効成分が含まれています。鎮痛鎮静・筋弛緩・抗けいれん・血管拡張・抗炎症など幅広い効果が報告され、筋肉のこり・腹痛・身体疼痛・手足のひきつれ・胃けいれん・下痢などに応用されます。また、血液を滋養し、婦人科系の働きを整える働きがあり、漢方では益気・補血薬(婦人向けの強壯薬)として、月経不順・生理痛・冷え症(冷え性)・不妊症・帯下などに使われます。

美しい女性をたとえて、「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」といわれます。可憐で美しい花を咲かせるとともに、この生薬を服用する女性は、シャクヤクの花のように晴れやかで美しくなるという意味も秘められています。シャクヤクは婦人病の要薬として、「美」にも縁の深い生薬です。

3月21日から1週間、宮城県の医療機関へ支援に行きました。

被災地周辺には数多くの避難所があり衛生状態のよくないところもありました。避難所には医師や看護師などの医療スタッフとともに数名で訪問し、私は医師の処方にしたがい、その場で調剤して患者さんへお渡ししたり、避難者が持っておられた薬の鑑別などを行ったりしました。また現地の薬局でも業務を行いました。職員も当然被災しており、そんな状況でも患者さんへの薬剤提供を震災直後から休むことなく続けていました。津波などで薬が流されてしまった方も多く、薬を必要としているたくさんの方の患者さんへ薬剤師としてできる限り必死にがんばっている現地スタッフの姿に、私も少しでも手助けになればとの思いでがんばりました。

ひまわり薬局 西山真純



株式会社健康共同ファルマ 入社式

よ3しくおねがいます!!



左から事務新入職員の迫田佐枝子(本社)、浦田彩実(ひまわり薬局)

ACCESS MAP



福祉用具貸与事業所ひまわり

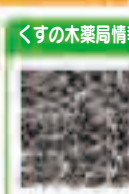
私たちは、利用者様の「介護せ配達人です!」
福祉用具貸与事業所の仕事は、自宅で介護が必要になった方の住環境を一緒に考えることです。お客様にとって身近な事業所になれるよう、日々努力しています。2011年もよろしくお願いたします。
福祉用具販売、レンタル、住宅改修工事等何でもご相談下さい。
(株)健康共同ファルマ 福祉用具貸与事業所 ひまわり
熊本市神水1-21-16 電話(096-387-5211) FAX(096-387-5323)
Eメール:okamoto@kk-pharma.jp 岡本 修

開局時間

曜日	時間
月~金	午前9時~午後6時00分
水	午前9時~午後7時30分
土	午前9時~午後1時00分
日・祝	休業

携帯で簡単登録!

住所や電話番号の情報が載っているQRコードです。



くすの木薬局だより

発行所/くすの木薬局
〒861-8006 熊本市龍田5丁目1番43号
TEL096(337)5600 FAX096(339)9590
発行責任者/山田 泰弘
HPアドレス/http://www.kk-pharma.jp/

2011
No.38

初夏号



二つの震災から学ぶこと

東日本大震災は、3月11日の太平洋三陸沖を震源として発生し、津波と原発事故も相まって、甚大な被害をもたらしています。亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。各薬局をご利用いただいている皆様から寄せられました義捐金・物品は熊本民医連としてまとめた後、全日本民医連を通じて被災地に送らせていただきました。ありがとうございました。



取締役・さくら薬局 甲斐 康幸

私たち健康共同ファルマからは求められた薬剤のリストから降圧剤を早速送り、その後、宮城に二人の薬剤師が支援に出向きました。

さて、私達薬局の加盟する全日本民医連は過去に(1995年1月17日)阪神・淡路大震災を経験し、その支援の経験からいくつかの教訓を得ました。それはまず被害にあった現地の病院・薬局が地域のネットワークを生かし救命など当面の支援を全力で行なうこと。そして、その「被害の実態」とともに、そのときに求められる「人」「物」の情報を発信し続けることです。全国からかけつけた仲間の支援スタッフを統括し、他の団体と調整する仕組みも必要です。支援物資も具体的なりストを作成し、以前のように支援物資の整理(違う銘柄の薬が重なるなど)に手間を取られことも防ぎます。

支援の中身も当初の救急医療から次第に慢性疾患管理、悪化防止、リハビリに移り、後には心のケアの必要性が強調されました。支援に行かれた方々の二次被災のケアも必要です。

今回は原発の事故も重なりさらに健康の回復ともに地域の復興が大きな課題として残っています。「地震・津波から原発を守るのか」との以前から国会等での指摘が生かされなかったのが悔やまれます。そして、それは私たちの住む町でもこれから考えていかないとけない課題でもあります。まだまだ支援は必要と思われる。今後ともよろしくお願いたします。

